

## デカルトにおける「最高で完全な道德」の位置づけについて

三上航志（京都大学）

デカルトの『哲学原理』の仏訳は1647年に出版された。その序文には、哲学を一本の木に見立てた有名な比喩が登場する。その根は形而上学であり、その幹は自然学、そして幹から伸びる枝は、医学、機械学、道德である。デカルトはこの道德を「最高で完全な道德 (la plus haute et la plus parfaite morale)」(以下「完全道德」と略記)と言い換え、さらに完全道德とは「他の諸学の完全な認識を前提とする、知恵の最高の段階である」(AT. IX2, p.14.)と述べる。このように哲学の木はデカルトにおける諸学の統一という構想を象徴的に表している。

しかしこの「完全道德」は解釈上実に多くの困難を孕んでいる。完全道德の全体像に関する詳細な記述が見出されないように思われるのみならず、デカルト自身、完全道德は到達困難なものであるとさえ示唆しているように見えるからである。果実が枝の先端において摘み取られるのと同様に、「哲学の主要な効用は、最後になって初めて学ぶことができる部分の効用に依存している」にも関わらず、デカルトは「その部分をほとんどすべて知らない」と述べるのである。(AT. IX2, p.15.)

以上のような事情を踏まえ、多くの解釈者は、この完全道德を実際に形成されることのない単なる理念であると解釈してきた。例えばゲルーは、確実な学知によって支えられた完全道德の構想は廃棄され、1643年から始まるエリザベトとの書簡、シャニュ、クリスティナとの書簡、そして1649年の『情念論』において見いだされる道德がこの完全道德の代用品となっている、というのである。(Gueroult, M.[1953])

しかしこのような解釈に反対するのが、カンブッシュネルである。彼はデカルトの道德における一定の理念性を認めながらも、1646年6月15日及び1649年2月26日のシャニュ宛書簡に照明をあて、学知に基づいた完全道德の構想が実際に絶えず前進していたことを示すのである。カンブッシュネルによれば完全道德とは、完成されたものではないものの、単なる理念なのではなく、常に形成の途上にある構想なのである。(Kambouchner, D. [2008])

本発表では以上の解釈の比較検討を行い、デカルトの完全道德の位置づけを探る。その際、「哲学の木」そのものの解釈を重視したい。というのも、ゲルーにおいては、この比喩は厳密に捉えられ、諸学は演繹的な関係で統一されると考えられている一方、カンブッシュネルにおいては、諸学が唯一で同一の知的能力によって統一される事態が、諸学の統一として解釈されており、「哲学の木」そのものの解釈の違いが、両者の完全道德に関する評価の違いに少なからぬ影響を与えていると思われるからである。本発表では、モローの最新の研究を参考にしながら、デカルトにおける諸学の統一の解釈に立ち返り、完全道德の位置づけを捉え直したいと考えている。(Moreau, D. [2015])

[一次文献]

Descartes, R., *Œuvres de Descartes*, publiées par Ch. Adam et P. Tannery, 11 vols, Vrin, Paris, 1996.